

まちを自分の足で歩き、 自分の肌で感じとる文化政策

——ガイドブック『くにたち時層のたび』の作成をめぐる——

河東 仁

(立教大学名誉教授)

はじめに

昨年度の『まなびあい』においては、筆者の専門である日本における夢見文化の諸相について記した。そして今年度は、定年退職した教員が、どのようなことをしているのか、その一例を紹介してみたい。

筆者の専門は宗教学である。しかしコミュニティ福祉学部（一学科時代）に着任してからはコミュニティという事象と、それこそ素手で取り組んできた。もちろん新宗教の教団調査などを通して、学部生・院生時代に、調査法は量的も含め、ある程度身につけてきた。しかしそれまでコミュニティというものに関する知見はなく、いわば手探りの状態でさまざまな方法・技法を試み、それらを「文化政策」の名によってくるに到った。言い換えると、コミュニティ政策学科において、必要不可欠な領域として、「文化政策」の潜在的可能性を実践的に考察したのである。

具体的には、ゼミなどを通してのファシリテーション法をめぐる試行錯誤、たとえば想像力と創造力の翼を自由に拡げる時空間をつくり出す、プログラムの実践的開発である。その最大の結実は、富士見市の小学生50名を集めて、10m×1mほどの紙に自由に絵を描いてもらったり、10m×10mの折り紙で作品をつくってもらう。その際、小学生を10名ずつ5グループに分けて、それぞれに紙を用意し、そこにゼミ生が数名入りファシリテートする、「みんなでアーティスト」というプログラムである。

またそれ以前に、コミュニティガーデン活動を通して、さまざまな年齢、国籍、性、文化、思想信条、職業、しょうがいをもつ人びとがお互いにつながりをもつ、《おこめづくりと人の輪づくり》を埼玉県の小川町にて展開した。さらには新座キャンパス内に、コミュニティガーデンを実際につくったこともあった。

2011年度以降は、大災害に遭った地の一つ、宮城県南三陸町へ学生とともに頻りに訪れた。その際の基本的な姿勢は、ボランティアするでもなく、寄り添うでもなく、ひたすら、自発的内発的に湧出して動いている復興プログラムに参加して、コミュニティの繋ぎ直しを「学ぶ」ことに力点を置いた。このことに関しては、本年度の本学部研究紀要において、ともするところした「支援」活動に伴われる、善意による活動の《搾取性》《侵襲性》をキーワードとして公表する予定である。

また新座市に関して、神社や寺院を紹介するパンフレットをゼミにて作成し、市役所を介して市内各所に配布した。在任最後となる2019年度の3年次ゼミにおいては、新座市のみならず周辺にあるエスニック料理の店——ビーガンなどベジタリアンの店も含む——を紹介するパンフレットを作成した。これを契機として、キャンパス内での留学生と日本人学生との交流の輪が広がることが主眼の一つであった。しかしCOVID-19により閉店するところが続出、発行は断念せざるをえなかった。まことに残念なことである。

さらに2019年度には、2年次ゼミにおいて、中央線国立駅の駅舎改築によって生ずる駅前広場の活用をめぐる、さまざまな提言を策定し、市議員に託した。しかしこれまたウイルス禍により駅前広場の改修計画が停滞したままとなってしまった。

そこで退職後に、これらを引き継ぐ形で作成しているのが、国立市のガイドブックである。これまた社寺の紹介を中心としたものであるが、ここで「時層」なる地理学上の概念を援用し、市内の各地の先土器時代からの歴史、文化史を取り入れた、単なるガイドブックに終わらない内容にしようと計画している。

原稿に関して、現時点で8割は完成しており、このノートにおいて、その一端を紹介したい。その最大の目的は、コミュニティの活性化を考える上で、その地の文化、歴史を改めて見つめ直すこと、またそもそもそうした文化や歴史を産みだした地形について調べることにある。そのため車での移動はせず、すべて歩きながら、肌で「何か」を感じ取る。そしてその後、必要に応じて、図書館にて文献で調べるといった形をとった。

余談であるが、ステイホームは高齢者の身にとって非常に辛い。それだけに、この社寺詣では、筆者には信心がないとはいえ、極めて良い運動にもなった。

I. 『くにたち時層のたび』

1. 表紙

まずは表紙に、このパンフレットの作成目的を記したので、それを転載したい。

《このパンフレットは、東京都国立市にある神社や寺院を紹介してゆくものです。ただし単に写真を並べ、説明文を書き連ねるだけに終わらず、この市の豊かな自然環境や歴史の厚みと流れも、可能な限り掘り下げてまいります。

これを見る皆さまには、是非、市内をあちこち、さらには近隣の市の自然や歴史を楽しんで頂ければと思います。》

《「時層のたび」という聞き慣れない言葉は、青柳段丘や立川段丘といった多摩川が造りだした独特の地形、場所によっては先土器時代にまで遡れる人間の営みの流れを肌で感じとり、想いを駆け巡らせる散策、そのような意味合いを込めたものです。

このパンフレットが、皆さま自身の時層マップをつくる切っ掛けになれば幸いです。
立教大学名誉教授 河東仁（宗教学・宗教学史学）》

2. 谷保天満宮・三社合殿

国立市の社寺に関して、その代表格となるのが谷保天満宮である。本パンフレットも当然のことながら、谷保天満宮の歴史から書き始めている。そしてここでは、その一例として三社合殿と呼ばれる境内社の記事を紹介したい。

《甲州街道から赤い鳥居が見えますので、くぐったらすぐ右へまがって下さい。そこに三社合殿があります。

祀られているのは、向かって左から稲荷神、淡島神、瘡守神です。最後に関して「蒼守神」と記されることもありますが、これは「蒼（あお）」でなく「瘡（かさ）」が正しい表記です。》

その理由は、全国どこにも「蒼守神社」は存在

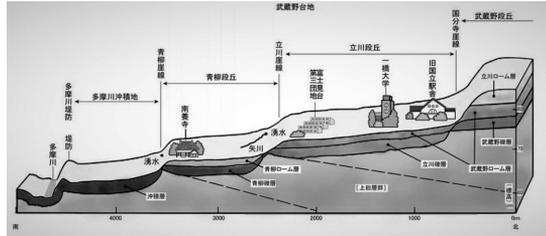


図 1



図 2 「国立の景観特性」20頁より



写真 1 三社合殿

せず、恐らくは「瘡守神社」を読み違えたためと思われることにある。実際に「瘡守神社」なら、近隣の市に幾つか存在する。そこで次のような説明をパンフレットに記した。

《「瘡（かさ）」そのものは、「天然痘、できもの、はれものなど、皮膚病の総称。また、傷の治りぎわにできるかさぶたをも」指す語です——『日本国語大辞典』小学館。そして同じく皮膚病の水疱（すいほう）を意味する「疱（ほう）」の字と併せて、「疱瘡（ほうそう・いもがさ）」と呼ばれることもあります。

つまりは天然痘を代表とする感染性の高い流行病（はやりやまい）、皮膚系の疾患を「疱瘡」と記し、「ほうそう」とか「いもがさ」と読んだ。それゆえ「瘡守（かさもり）神」とは、「疱瘡」から守って下さる神ということになります。また「疱瘡神」と表記される場合には、流行病をもたらす神そのもので祓うべき疫神（えきじん）であると同時に、病から守って下さる神ということにもなります。実に複雑ですね。》

そしてこのあたりのことは筆者の専門領域ですので、こう続けます。

《なおこのパンフレットの原稿を書いている時点で、COVID-19が猛威をふるっています。そのため日本人が奈良時代以降、疱瘡の病とどのように接してきたかを取りあげる中学校の副指導書も出てきました。ことに疱瘡と赤い玩具の関係について記述しており、非常に興味深いです。よろしかったら、このQRコードからご覧下さい。また江戸東京博物館では、「不思議なきもので疫病退散！『えどはくカルチャー 2020夏 江戸の不安と信仰① 病を避ける図像』」をネットにて公開しています。》



QR 1



QR 2

さらにパンフレットにおいては、同じくあまり知られていない「淡島信仰」についても説明している。

《『国史大辞典』吉川弘文館は「淡島信仰」についてこう記しています。

「和歌山市加太浦の淡島神社の祭神に対する信仰。祭神についていろいろの伝説が語られているが、この神は住吉神社の妃神で、白帯下（こしけ）の病〔おりもの〕のためにここに流されたという。そのため婦人（しも）の病・安産祈願・縁結びなどに利益〔りやく〕がある……。岩手県では性神として男の金精様〔こんせいさま〕に対して女の淡島様を祀っている。……（大藤時彦）』

そして疱瘡と女性特有の病をめぐる知見を合わせることによって、次のように記述することが可能となる。すなわちこの三社合殿は、今はその役割が忘れ去られているが、かつては、疱瘡（天然痘）や女性特有の病を治し、稲荷神の力によって運気を向上させる役割を果たしていたのである。

2. 谷保天満宮・巖島神社

谷保天満宮の境内社には、巖島神社もある。言うまでもなくこの本社は、《広島県佐伯郡宮島町にある神社。……祭神は市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）、田心姫（たごりひめ）命、湍津姫（たぎつひめ）命ほか。……推古天皇元年（五九三）の創祀と伝えられる。特に、平清盛はじめ平氏一門に厚く崇敬され、……世界遺産に登録されている」——『日本国語大辞典』》。

ただし谷保天満宮の巖島神社の祭神は、弁天である。この祭神の交替について、パンフレットにおいては論じておいたが、本稿では割愛し、これが谷保天満宮の境内社となった経緯について話を移すことにしたい。

そもそもこの社は、江戸時代末期までは、現在の地よりほぼ真西に1キロほど歩いた地にあった。その地の字名（あざめい）は「石神（しゃくじ）」である。その御神体は現在、「魂抜き（たまぬき）」の儀を経たうえで、谷保天満宮にて保存されている。その貴重な写真を社務所の許可を経た上で、パンフレットに掲載した。



写真2

なおこれは世間的にあまり知られていないことであるが、この谷保の地は、縄文時代、さらには先土器時代の遺跡が発見されており、恐らくこの石棒は、縄文時代中期に作成されたと推定されており、2012年には、市内の緑川東遺跡より、1m以上もある石棒が4本並べられた形で出土し、2017年に国の重要文化財として認定されている。それゆえ上述の石棒は、弥生時代になってから、「石神様」と呼ばれる豊穰の神として祀られてきた。そして明治期に入り、廃仏毀釈と同時に神社の整理統合が行われるなか、谷保天満宮に巖島神社として包摂されたと想定される。

3. 石棒と人面把手付き土器

国立市の縄文時代中期の遺跡からは、写真3の調理用土器も出土している。いわゆる壺になっている部分にて具材を煮るための道具である。そして把手のように人面が付けられているのが特徴であり、これは日本の他の地域でも出土し、人面の他に、乳房、あるいは赤子が付けられていたりして、明らかに女性を表している。



写真3

つまり女性が胎児を宿して育むように、食物を腹に宿し、産み出すという論理である。もちろんこれは仮説の域を出ることはないが、ほぼ定説となっている。

しかし国立市にて出土したこの土器には、他の地域の人面把手付き土器と大きな違いがある。それは、他の地では人面が内側、つまり自分の腹の方に向いているのに対して、国立市出土のものは、外側を向いていることである。

自分の足で歩き、肌で感じることを目的とする「時層のたび」にて、この土器

に出遭ったとき思い浮かんだのが、次のことである。

《縄文の世から男女共同参画のまち国立。社会向けの顔をもつ（=ものを言う）女性の活躍するまち国立》。

もちろん石棒と人面把手付き土器とが、同じく縄文時代中期のものとはいえ、同時に使われたとの痕跡は一切ない。しかし共同参画をこのパンフレットにても呼びかけることで通常の観光ガイドとは異なる味付けをした次第である。実際、女性（神）に対する差別の問題に関してはかなりのページを用いている。

4. 浅間堂の謎

こうした「時層のたび」のなかで当初より気になっていたが、内部に入れないため、その正体が分からない宗教施設が、青柳稲荷神社の参道入口の左にある。市販されている地図には、「浅間堂（せんげんどう）」と記されている。つまり富士山を御神体として崇める浅間信仰の堂と思われる建物である。しかしどう見ても神社様式ではない。そこで訪れること三度目にしようやくその謎が解けた。社寺において名称を記した扁額（へんがく）が飾られる位置に、浅間堂と確かに記されている。だがよく見ると、それは扁額ではなく、庶民が自分の名前などを記した紙を貼る、いわゆる千社札だったのである。では何の建物かと言うと、文献調査の結果、地藏堂であることが判明した。



写真4

こうしたことなどコミュニティの在り方とは何の関係もない。しかし市民が参加するフェイスブックのグループにて、随時、発見したことや考えたことを記載していたため、同じ疑問をもつ人がかなりおり、首をかしげていたことが判明した。まことにマニアックで地味な活動であるが、市の活性化の一因となることを願っている。

さいごに——歩くことの重要さ

以上、退職した身の日常を知っていただくため、あれこれ蘊蓄を傾けた。しかしCOVID-19禍によるステイホームのなか、高齢者の足腰が弱体化することが危惧される。それだけに、普段、誰もいないことが多く、密になることのない社寺を散策することは、多大なる意義を有すると考え独り悦に入っている。しかも歩けば、さまざまな面白いことに出遭い、それを調べることによって、さらに想像が膨らんでゆく。このことを、これから到来する超高齢社会に向けて、ここに書き記しておきたい。



写真5